

平成 22年 5月 25日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520044

研究課題名（和文）中国古代における太陽とロータスと鳥の図像的イメージと神仙思想

研究課題名（英文） The images of the sun, lotus and birds, and the ideas of "shenxian (hermit)" in ancient China

研究代表者

大形 徹 (OHGATA TORU)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：60152063

研究成果の概要（和文）：研究の概要、中国では戦国から秦漢にかけて、太陽・ロータス・鳥の図像が多く描かれるようになる。そのもとにはエジプトにある。エジプトでは太陽信仰にもとづく再生復活観念が、太陽・ロータス・ハヤブサなどの図像を通して表現された。それらの図像は中国にも流入し、不死の仙薬や仙人という神仙思想を生み出す契機となった。当初の仙人は死者が復活する尸解仙と呼ばれるもので、エジプトのミイラの復活によく似ている。

研究成果の概要（英文）：People came to draw many figures as the sun, lotus and bird, from the Warring States Period to Ch'in and Han Periods in China, the originals of which are in Egypt. In Egypt, the ideas of the resurrection based on the faith of the sun were expressed by the figures which also came into China and made chances of creating the ideas of "shen xian (hermit)" there. The original hermits named as "shi jie xian", the dead who revived, resemble the resurrection of the mummy in Egypt.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1200,000	360,000	1560,000
2008年度	800,000	240,000	1040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2600,000	780,000	3380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：ロータス・パルメット・エジプト・太陽・鏡・鳥・房中術・陰陽

1. 研究開始当初の背景

(1)これまで仙人は、「長寿への希求」や「肉体をそなえたまま、かぎりなくその生をのばす」といった観点から考察され、長寿の延長線上に仙人がいると考えられていた。(2)しかし、当初の仙人は、いったん、死を経由して、それが復活再生する尸解仙である。けれども、なぜ尸解仙のような考えが中国におこ

ったのかということは解明されていなかった。(3)最初の仙薬は「芝(芝草・靈芝)」である。だが、なぜ仙薬とされるのか、それは本来、何であったのかについても不明であった。(4)本研究はこの未解決の二つの問題について、ロータスにもとづく図像であるパルメット文様を手がかりとして解答を見つけ出そうとするものである。

2. 研究の目的

(1) 中国の戦国から秦漢時代にかけての太陽とロータスと鳥の図像的イメージが、エジプト起源の再生復活観念および不死の観念と強く結びついており、それが神仙思想の形成にも大きな影響を与えていることを考察する。太陽は毎朝、新たに生まれることを繰り返す。そのため、永遠を象徴するとされた。ロータスは太陽と軌を一にする。夜は眠るかのように花が水中に沈み、翌朝、太陽が昇ると再び水中から顔を出し花開く。エジプトではロータス(青睡蓮)は再生復活の観念と結びつけられる。人面鳥バーが太陽の中に描かれる図がある。バーは魂とされ、この図は魂の復活を意味する。エジプトでは死者あるいは死者の魂が再生復活し、永遠の生命を与えられることを望み、そのためにミイラを作り埋葬した。この観念が時代も地域もはるかに隔たった中国の戦国・秦漢時代に伝わり、神仙思想を生み出したのではないかという仮説をたて、それを検証する。中国といえば中華思想であり、その文化は中国だけで完結しているというイメージが強い。シルクロードを通じてローマやアフリカとの交流は知られているが、絹を中心とした物の交換の話が中心で、仏教を除いては、思想史や宗教における影響はほとんど考えられていない。ここでは象徴的な意味をもつ図像の伝播が思想や宗教に大きな影響を与え、中国人の死生観をも変革させた可能性について考察したい。

3. 研究の方法

図像の影響関係を検証する。同時に文献によるそれらの説明を丹念に読み解く。仮説にもとづき、『山海経』など外国の伝聞の断片が記される文献を読む。同時に中国と外国(エジプト・ギリシア・ローマ・西アジア・中央アジア・北方遊牧民系の国家)の文物や図像の類似を比較整理する。とくにロータス系統の図像の伝播を中心にすえて、それが神仙思想の初期の仙人の典型である尸解仙(死者が復活した仙人)とつよく結びついていることを『史記』・『漢書』などの文献や楚帛画、馬王堆漢墓などの図、扶桑について研究する。

4. 研究成果

[雑誌論文](計5件)と[学会発表](計3件)を行った。ほかに未刊行のものがある。雑誌5では、馬王堆帛画とエジプトの図像などを比較対照して、その影響関係を調べた。

その比較図の一部を以下に貼り付けた。雑誌4では、六、陰陽の部分で、陰陽と太陽、日月の関連について考察した。雑誌3では鏡そのものおよびその背面の模様と太陽の関係について論じた。雑誌2では、日食を救う救日祭祀の話と十日神話について考察した。とくに三星堆の扶桑樹や鳥、太陽円盤について詳しく調べた。雑誌2では、馬王堆出土の房中術書の『十問』に登場する黄帝と天師と太陽の関わりを考察した。また未刊行のものでは、「陰陽と房中術」(京都大学人文科学研究所、陰陽五行研究会に提出したもの)の中で、「陰陽不死」について、考察した。

中国の戦国から秦漢時代にかけての太陽とロータスと鳥の図像的イメージが、エジプト起源の再生復活観念および不死の観念と強く結びついており、それが神仙思想の形成にも大きな影響を与えていることを考察した。

太陽は毎朝、新たに生まれることを繰り返す。そのため、永遠を象徴するとされた。ロータスは太陽と軌を一にする。夜は眠るかのように花が水中に沈み、翌朝、太陽が昇ると再び水中から顔を出し花開く。エジプトではロータス(青睡蓮)は再生復活の観念と結びつけられる。

人面鳥バーが太陽の中に描かれる図がある。バーは魂とされ、この図は魂の復活を意味する。エジプトでは死者あるいは死者の魂が再生復活し、永遠の生命を与えられることを望み、そのためにミイラを作り埋葬した。この観念が時代も地域もはるかに隔たった中国の戦国・秦漢時代に伝わり、神仙思想を生み出したのではないかという仮説をたてた。

中国といえば中華思想であり、その文化は中国だけで完結しているというイメージが強い。シルクロードを通じてローマやアフリカとの交流は知られているが、絹を中心とした物の交換の話が中心で、仏教を除いては、思想史や宗教における影響はほとんど考えられていない。ここでは象徴的な意味をもつ図像の伝播が思想や宗教に大きな影響を与え、中国人の死生観をも変革させた可能性について考察した。

中央アジアのバジリク出土の図像の花と馬王堆帛画の扶桑は酷似している。この花は睡蓮にもとづくパルメット形であろう。この扶桑は東方と関連づけられる神木とされ、のちには日本とむすびつけられた。この扶桑をかたどった青銅の扶桑樹が四川の三星堆より出土している。これは高さ3メートル以上もある巨大なものである。扶桑樹は陶製のものもある。扶桑については樹木であることのみが強調されているが、必ず鳥が留まっているこ

と、花の形がパルメット形(ロータスの側面形)であること、あるいは林巳奈夫のいう「天上のハス(ハスの正面形をもとにして花びらが簡略化され、四瓣になったもの)」になっていることに関しては、余り着目されていない。扶桑と芙蓉はよく似ており、『詩経』にみえる「荷(ハス)」と扶蘇の関係も興味深い。馬王堆の帛画に描かれる扶桑は樹木ではなく蔓植物のようにみえる。おそらく扶桑は太陽の再生不死観念と、太陽の象徴であるロータス(睡蓮・ハス)の花、魂の象徴である鳥の集合体で、太陽が次々と生み出されるように鳥の形をした魂もまた復活再生するという考え方をその根底にもっているのではないと思われる。この扶桑樹とはほぼ同様の形をし、樹木が三層の建物におきかわった形のものがある。軒丸瓦に相当する部分と屋根の最上部に天上のハスがあわせて九つ付けられ、最上部の屋根の中央には鳥がいる。

エジプトでは睡蓮(青睡蓮)は再生復活の観念と関連する。睡蓮の花と蕾の花束の図像は数多ある。ミイラに捧げられるものは死者の再生復活を扶ける意味をもつ。睡蓮の花と蕾を側身形の人物が手にもつ図像はエジプトからアッシリア、ペルシア、インドへと及び、カンボジアまで伝わっている(山田篤美「エジプト睡蓮の伝播」『文化遺産』8号)。睡蓮と蓮はインドで共生することにより混同され、睡蓮と類似した性質をもつ蓮に睡蓮のイメージが重ね合わされることとなる。山田篤美氏はなぜか中国については全くふれていないが、同様の図像は『石索』に見いだすことができた。つまり、中国にもその流れは伝わっているのである。リーグル『美術様式論』では、この睡蓮の図像の側面形をパルメット文様と呼ぶ。この文様は世界に広まっており、同書の大半がこの文様に関する考察である。ところが、リーグルは中国については考察しておらず、この書物の中で中国は大きな空白となっている。しかし、漢代の画像石にみえる側身形の羽人が手にもつ「芝」の図像はまさにパルメットであり、土居淑子はそれを三瓣パルメット形(『古代中国の画像石』同朋社)と呼んでいる。これは当時の刺繍にも多くみえる。なおハスの伝播については森豊(『シルクロード ハスの伝播の道』)が詳しく考察している。

中国やインドではハスが睡蓮にとってかわった。ハスは仏教と結びつき、蓮台のようにインド伝来のものと語られる。けれども中国でも古代よりハスは重視されていた。林巳奈夫氏は「中国古代における蓮の花の象徴」(『東方学報』)において、仏教伝来以前より中国に

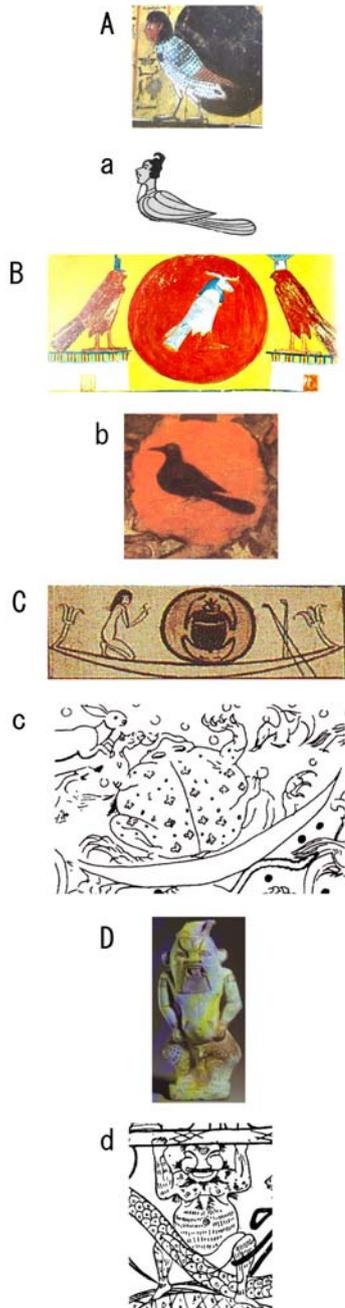
ハスの図像が多くあり、それが重要な役割を示していることを論じている。ハスの図像が墳墓の石室の天井に嵌め込まれるものを、「天上のハスの花」と述べ天を象徴するものとみる。ただし氏はハスの正面形の図像のみを考察しており、その側面形のパルメット形はハスとはみなしていない。林巳奈夫氏は『龍の話』(中公新書)で、このパルメット形について、「茅のツバット形について、「茅のツバナ」→「庚(甲骨・金文)」上部の三つの枝分かれ→神や鳳凰頭上の飾り→龍尾の飾り→雲気文末端→龍虎に与えるエッセンス→壁上部→画像石で植物の芝草→きのご類ととらえている。つまり林氏はパルメット形をハスとはみなしていないのである。

エジプトではある時期から太陽信仰による死生観が支配的となる。日没と日の出を太陽の死と復活と見て、それが人にも適用されると考えたのである。いわゆるミイラの復活信仰である。太陽と動きをともにする睡蓮は、太陽を象徴するものとされ、その図案化のパルメット文様もさまざまなところに使用された。そしてそれらは中国にも伝わっていると思われる。馬王堆帛画を例に取れば、三足鳥はエジプトの太陽の中のハヤブサで、蟾蜍は三日月型の船に乗るスカラベ、人面鳥の句芒は魂の具現化である人面鳥のバー、崑崙山とみなされる柱はオベリスク、力士は地獄の神で死者の審判を行うベス、女女偶はオシリス復活させたイシスではないだろうか。扶桑の枝から花が咲き、そこから太陽が生まれるという十日信仰は、起源をエジプトまで遡らせることは難しいかもしれないが、明らかに太陽の動きにもとづく再生復活観念の図像化である。西方と中国では言葉が異なるため、まず図像の伝播を通じてそれらの死生観が伝わり、それが神仙思想の誕生のきっかけになったのではないだろうか。初期の仙人である尸解仙は死者が復活するもので、その考え方はミイラの復活思想に酷似しているのである。

図版

- A エジプトのバー
 - a 馬王堆帛画の人面鳥
- B エジプトのハヤブサ
 - b 馬王堆帛画の鳥
- C エジプトのスカラベ
 - c 馬王堆帛画の蟾蜍
- D エジプトのベス
 - d 馬王堆帛画の力士

(図版の詳しい書誌情報は大形 徹、中国の死生観に外国の図像が影響を与えた可能性について-馬王堆帛画を例として、東方宗教(雑誌)、日本道教学会 110 号、2007、pp.1-36 参照)



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ①大形徹、馬王堆房中書の書誌学的考察—十問・合陰陽・天下至道談を中心として—、人文学論集 第 28 集、2010、pp. 23-44、査読無し
- ②大形徹、救日祭祀と十日神話、アジア文化交流研究、第 4 号、2009、pp. 1-20、査読無し
- ③大形徹、鏡と太陽信仰—東アジアの鏡の図案より—、中国研究集刊、第 48 号、2009、pp. 1-30、査読無し
- ④大形徹、『道德經』にみえる「精」と房中術—広成子・大成・容成等「成」のつく人物との関わりから—、人文学論集 第 26 集、2008、pp. 55-67、査読無し
- ⑤大形徹、中国の死生観に外国の図像が影響を与えた可能性について-馬王堆帛画を例として、東方宗教(雑誌)、日本道教学会 110 号、2007、pp. 1-36、査読有

[学会発表] (計 3 件)

- ①大形徹、老子里的精与房中術 国際道德経論壇、2007 年 4 月 23 日、中国 西安 Sofitel On Remin Square
- ②大形徹、鏡與太陽信仰 国際学術研討会—東アジア文化の発生・変遷・交流— 2008 年 10 月 25 日、中華民国(台湾) 台南県、致遠学院
- ③大形徹、房中術と陰陽、2008 年 11 月 15 日、陰陽五行研究会 京都大学人文科学研究所本館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大形 徹 (OHGATA TORU)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：60152063